「池上彰　緊急スペシャル！」
インタビュー映像誤使用問題に関する
検証および再発防止策

2015年9月

㈱フジテレビジョン　情報制作局

１．はじめに

６月５日放送の金曜プレミアム「池上彰 緊急スペシャル！　知っているようでよく知らない韓国のナゾ」において、韓国の人に日本の印象を聞く街頭インタビューのパートで、２か所合わせて約１０秒、翻訳テロップ並びに吹き替えナレーションの内容と異なる映像を誤って放送しました。これについて番組の公式ホームページと弊社の自己検証番組において、視聴者、番組制作に協力してインタビューに答えていただいた方々、並びに関係者にお詫びするとともに、再発防止に努めていくことを表明しました。

フジテレビ情報制作局では、調査班を組織し、当該ディレクターやアシスタントディレクター、プロデューサー、総合演出、そして当該部分を翻訳した通訳などからの聞き取り調査を行い、制作過程の一つ一つを検証しました。この報告書は、この調査班が中心となり、まとめたものです。

２．番組概要と制作体制

６月５日（金）２１時～２２時５２分放送の金曜プレミアム「池上彰　緊急スペシャル！」は、ジャーナリストの池上彰氏が、スタジオでゲストを前に１つのテーマについて、取材ＶＴＲ等を交えながら解説するスペシャル番組（ＶＴＲ収録）です。

番組のテーマは「知っているようでよく知らない韓国のナゾ」。国交正常化から５０年という節目の年にもかかわらず、緊張状態の続く日韓関係を受け、隣国・韓国との関係を学びながら、日本の歩むべき道を探っていくことをコンセプトとしました。

番組では、“ 日韓首脳会談 ”“ 日本嫌い ”“ 財閥 ” など５つのコーナーを用意、様々なデータやＶＴＲを交えて解説しました。

番組を制作するにあたっては、フジテレビ情報制作局からチーフプロデューサー（以下、ＣＰ）とプロデューサー（以下、Ｐ）が立ち、制作会社に制作を委託。制作会社のスタッフはプロデューサー１人、アシスタントプロデューサー１人、総合演出１人、ディレクター４人、アシスタントディレクター３人の計１０人です。

また、テーマが日韓関係という非常に繊細なものだったため、歴史的背景については、韓国・北朝鮮の国内政治及び北東アジアの国際政治の専門家の監修を受けています。

最終的なスタジオ台本、ＶＴＲのナレーション原稿については、情報制作局の危機管理担当３人によるチェック、最新の日韓関係などに関しては、報道局外信部の担当者によるチェック、池上氏のスタジオ解説で使う、データ、引用記事などの文字表記については、校閲スタッフによるチェックを行い、ミスがあれば修正しました。最終的に編集されたものについては、納品前に、再度、ＣＰ、Ｐ、総合演出が立ち会い、テロップミスがないか等チェックを行いました。

３．放送までの経緯

<u>５月１４日（木）～１７日（日）　韓国取材</u>

韓国での街頭インタビュー撮影を担当したチーフアシスタントディレクター（以下、チーフＡＤ）は、１４日に韓国入り。街頭インタビューは韓国人コーディネーターと韓国人カメラマン（いずれも現地コーディネーション会社所属）との３人で、１５日、１６日の２日にわたってソウル市内で実施し、計６０人から話を聞きました。

<u>５月１８日（月）、１９日（火）　インタビューの翻訳作業</u>

チーフＡＤは、翻訳会社から韓国語の通訳５人を制作会社に呼び、撮影した６０人分のインタビュー（６０分テープ６本分）などを、２日間（のべ７７時間）かけて全て翻訳してもらいました。当該部分を担当した通訳（キャリア１０数年）は、２日間で３０人分を翻訳。静かな会議室でＰＣを使った作業で、悪い環境ではなかったといいます。

５月２０日（水）～２２日（金）　Ａディレクター編集作業　＜問題点Ｉ＞

今回の番組で「なんで韓国は、そこまで日本が嫌いなの？」というコーナーを担当し、街頭インタビューを編集することになったＡディレクターは２０日、６０人分の翻訳シートとインタビュー映像の入ったハードディスクを受け取り、まず日本語訳が書かれた６０人分の翻訳シートに目を通して、気になるインタビューにマークを付けてチェック。その部分のタイムコード（編集する際に目印となる、撮影したテープのどこに映像があるかを示す数字）をもとに、ハードディスクから該当する映像データを編集用ＰＣに取り込みました。その後、スタジオ収録の際に流すために、日本を「好きな人」１０人「嫌いな人」１０人のインタビューをまとめた４分１５秒のＶＴＲに編集しました。

この作業の際に下記の２つの問題が生じました。

①女性のインタビューの場合

Ａディレクターは、日本について答えている以下の部分を使うことを決めました。

＜元々、抜き出そうとした映像素材＞

タイムコード	
２５４３２９	Ｑ「日本のことをどう思いますか？好きか嫌いか、どっち？」
２５４７１７	Ａ「嫌いです」
２５４８１２	Ｑ「その理由は？」
２５４９１４	Ａ「韓国を苦しめたじゃないですか。」

※「２５４３２９」という数字は、映像素材上のタイムコード２５分４３秒２９フレーム（１フレーム＝１／３０秒）を意味し、ＰＣ上にデータとして数字で表示されます。

調査班が、Ａディレクターが編集した映像や翻訳シートを検証したところ、実は、最初の作業段階で誤って別のパートの映像素材を抜き出していたことがわかりました。

Ａディレクターは、上記の映像素材を編集で抜き出すため、網掛け部分の「２５４３」という数字を、ＰＣ上で打ち込むべきところ、誤って、「２５０３」（翻訳シート、以下の二重下線部分）という数字を打ち込んでしまい、その結果、韓国について答えている以下の部分を編集で抜き出してしまったとみられます。

＜誤って抜き出した映像素材＞

タイムコード	
２５０３２５	Ｑ「韓国について、好きか嫌いかだったら、どっち？」
２５０７１４	Ａ「好きです」
２５０８１８	Ｑ「その理由は？」
２５１０１５	Ａ「文化がとっても多いです。だから外国の人がたくさん、韓国に来てくれるんだと思います。」

さらにＡディレクターは、誤って映像を抜き出したことに気づかないまま、「嫌いですよだって韓国を苦しめたじゃないですか」という翻訳テロップをＰＣ上で作成し、インタビュー映像にそのテロップを載せました。こうして、最終的に放送で流れてしまう映像のベースが作られることとなりました。

Ａディレクターは、当初「なぜ誤ったタイムコードを打ち込んだか、記憶はなく思い当らない」と話していましたが、その後、翻訳シートを改めて見直して「タイムコードを打ち込む際、本来使うべき２５４３ではなく、２５０３と打ち込みミスをしたようだ」としています。タイムコードの秒の１の位がいずれも“３”だったこともあり、１０の位の“０”と“４”を打ち間違えたと推測されます。

＜誤って使用した部分と正しい部分のタイムコードの比較＞

＜誤って使用した部分＞
２５０３「韓国について好きか嫌いか」
２５０７「好きです」「理由は？」
＜正しい部分＞
２５４３「日本のことをどう思う？」
２５４７「嫌いです」「理由は？」

※ＰＣを使った編集の場合、「分・秒・フレーム」の６ケタを入力する必要がありますが、インタビューを抜き出す場合、通常、タイムコードのフレームは「００」と打ち込むことが多く、今回、Ａディレクターも同様の入力方法を取りました。そのため、この後の説明では、フレームを省いた４ケタの「分・秒」で表記することにします。

打ち間違えに気づかなかった理由は、誤って使用した部分と、正しい部分がいずれもおよそ３秒間の質問、１秒の短い答え（好きか嫌いか）、再び短い１秒の質問（理由）そして答えという、よく似通ったリズムで会話が成立しており、違和感を覚えなかったことが考えられます。また、Ａディレクターは、最初に誤ったタイムコードで映像素材を抜き出してから、一度も女性のインタビュー部分の映像・音声と翻訳シートの訳が一致しているかをチェックしていません。

②男性のインタビューの場合

Ａディレクターは、翻訳シートのタイムコードから、以下の部分を使用する映像素材の候補にすることを決めました。そして、インタビュー映像素材から編集で、＜図１＞をブロックとして抜き出しました。

＜図１：最初に抜き出した映像素材＞

タイムコード	映像素材	テロップ
１０４２	日本については？	
１０４３	日本という国は、嫌いです。	嫌いですよ。
１０４６	その理由は？	
１０４９	反省しないということ。 以前から過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと…	歴史を反省しない所が非常に残念です
１１００	その点だけでも直れば、韓国の立場としては、被害を受けた側なので、すまなかったと一言、言ってくれたら、互いの関係は緩和されると思います。	
１１１０	日本人一人一人は、いい人も多いのですが、国としては残念なところがあるので、好きか嫌いかと聞かれたら、嫌いのほうになってしまいますが、憎んでいるのではありません。	日本人にはいい人もいますが、 国としては嫌いです。

そして、＜図 1＞左側の映像素材の下線部（下線と二重下線）を使用すると想定し、その内容を＜図１＞右側のように意訳して、「嫌いですよ。歴史を反省しない所が非常に残念です。日本人にはいい人もいますが、国としては嫌いです」と翻訳テロップを作成。

次のスタジオ収録用ＶＴＲへの編集過程をイメージ化したものが＜図２＞です。

＜図２　編集の過程＞

タイム尺	映像素材	テロップ
02 秒 13F	日本という国は、嫌いです。	嫌いですよ
10 秒 04F	反省しないということ。 以前から過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと… ～～～～～～～～～～～～～～～～ ※男性のしゃべり始めから、１０秒で映像を編集したため、右のテロップに対応する映像はカットしました。	歴史を反省しない所が非常に残念です ***日本人にはいい人もいますが、国としては嫌いです*** ※意訳した部分のテロップは残すことになりました。

＜図３　スタジオ収録用ＶＴＲ＞

タイム尺	映像素材	テロップ
02 秒 13F	日本という国は、嫌いです。	嫌いですよ
10 秒 04F	反省しないということ。 以前から過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと…	歴史を反省しない所が非常に残念です ***日本人にはいい人もいますが、*** ***国としては嫌いです***

その結果、編集でできたのが、＜図３＞の約１０秒のスタジオ収録用ＶＴＲで、抜き出した映像素材（網掛け下線部分）の「日本という国は、嫌いです」「反省しないということ。過去の歴史を反省せず、そのような部分が私はちょっと…」という部分を使っています。インタビューのしゃべり始めから１０秒を編集したため＜図１＞のタイムコード１１１０で話されている二重下線部分の「映像素材」は、カットされ含まれていません。

しかし、テロップは、＜図２＞***斜体太字部分***のタイムコード１１１０の部分を意訳した内容***「日本人にはいい人もいますが国としては嫌いです」***が、打ち込まれました。

この時点で後半は映像素材とテロップが合わないＶＴＲができあがりました。

なぜ、このようなことが起きたかについて、Ａディレクターは、「トータルとして、同じ文脈の中で話している内容をきちんと反映しているので、しゃべり出しが一致していれば、多少のズレは意訳として許容範囲と認識していた」と話しています。

元々抜き出した映像素材のブロックは約４０秒の長さがありますが、その内容を日本語でうまく１０秒程度のインタビューにまとめる際、含まれている言葉をすべて正確に映像と対応させようとすると、何カ所も編集したブツ切りの映像となるため、冒頭のしゃべり始めから１０秒の映像で表現しようとしました。当然、日本語の吹き替えナレーションがメインとなり、元の韓国語の音声は副次的なものになるということも意識していました。

この男性インタビュー映像に関しては、その後、別のディレクターが編集することによって、映像と翻訳テロップ並びに吹き替えナレーションとが食い違うことになります。

５月２１日（木）　街頭インタビュー「スタジオ収録用ＶＴＲ」プレビュー

フジテレビ社内で、スタジオ収録の際に流すＶＴＲのプレビューを実施。ＶＴＲには、オリジナルの韓国語の音声を残し、翻訳シートをもとにした日本語の翻訳テロップがスーパーインポーズされていました。Ａディレクターによれば、ここまでの編集作業にかけられる時間は２４時間ほどあり、「時間に追われていたわけではなかった」と話しています。

プレビュー後の会議で、「好きな人」「嫌いな人」計２０人のインタビューＶＴＲ（４分１５秒）の長さを縮めること、および「好き」と「嫌い」両方の意見を混在させて編集す

ることが決定されました。

５月２３日（土）　編集所での編集作業

編集所では、２１日の会議の決定に従い、Ａディレクターがスタジオ収録用の街頭インタビューＶＴＲを編集スタッフとともに編集。インタビューを１０人に絞り込んで、２分１５秒に短縮しました。

５月２６日（火）　スタジオ収録用ＶＴＲ韓国人インタビュー吹き替え収録

同編集所のＭＡスタジオで、スタジオ収録用ＶＴＲのためのナレーション収録等を実施。Ａディレクターが担当した街頭インタビュー部分の吹き替え作業も行われました。吹き替えナレーションの原稿は、翻訳テロップと同じ内容をそのまま読むということを基本に作成。ナレーション収録にはＣＰ、Ｐは立ち会いましたが、通訳などの立ち会いはなく、間違いに気づきませんでした。この作業をもって「スタジオ収録用ＶＴＲ」が完成しました。

５月２７日（水）～２９日（金）　スタジオ収録　～「１本化ＶＴＲ」の作成

５月２７日１９時からフジテレビ本社でスタジオ収録。この際、韓国人へのインタビューＶＴＲが流されましたが、スタッフや出演者から疑問や指摘はありませんでした。収録終了後、放送時間枠に収めるため、総合演出は担当コーナーごとに目安となる時間の割り振りを指示、Ａディレクターは韓国人のインタビューＶＴＲから２人分を削除しました。こうして時間を調整した各ディレクターの担当項目の映像データを、最終編集を担当するＢディレクターが集約。総合演出の指示のもとＰＣで編集してまとめあげ、スタジオ収録用ＶＴＲとスタジオ部分を合わせて放送用のひな形となる「１本化ＶＴＲ」を作成しました。

５月３０日（土）　全体プレビュー１回目　インタビューＶＴＲ方針変更　担当変更

フジテレビ社内会議室で「１本化ＶＴＲ」のプレビューを実施。「１本化ＶＴＲ」は放送枠に対して、５分ほど時間がオーバーしていました。街頭インタビューは独立したパートとして構成されていましたが、日本のことを「嫌いな人」と「好きな人」を混在させた編集では分かりづらいとして、独立したＶＴＲとしては扱わない方針に変更されました。

この段階で、Ａディレクターは、スケジュールの都合で編集作業から外れることになり、これ以降修正する編集作業の担当は、Ｂディレクターに変更となりました。Ａディレクターは離れるにあたって、翻訳シートのどの部分を使ったかなどインタビューに関する引き継ぎを、Ｂディレクターに対して行っていません。

その後、全体を短くしなければならないという課題もあったので、街頭インタビューは独立したパートにしない代わりに、コーナー冒頭のダイジェストＶＴＲに印象的な５人の言葉を組み込むことになりました。Ａディレクターは、「インタビューＶＴＲ自体がカット

されたと思っており、コーナー冒頭のダイジェストに組み込まれることになったことは知らなかった」と話しています。

５月３１日（日）　全体プレビュー２回目　＜問題点Ⅱ＞

フジテレビ社内会議室で、前日の指摘を反映させた改訂版「１本化ＶＴＲ」を改めてプレビュー。ＶＴＲはほぼ放送時間枠に収まっていましたが、ダイジェストＶＴＲに移した５人のインタビューについて、内容を見直すことにしました。問題になった２つのシーンについては、女性のインタビューはそのまま、男性のものは内容を変更するため再編集することになりました。この時点で男性のインタビューは「嫌いですよ」の一言に短縮されていましたが、Ｂディレクターが「日本人にはいい人もいますが、国としては嫌いです」という発言が、スタジオ収録用ＶＴＲの翻訳テロップにあったことを思い出して、その部分の映像を使うことを提案し、採用されました。

プレビュー後にＢディレクターは、制作会社で編集作業に取り掛かり、スタジオ収録用ＶＴＲ＜図３＞にＡディレクターが入れた日本語翻訳テロップ、「嫌いですよ。歴史を反省しないところが非常に残念です。日本人にはいい人もいますが、国としては嫌いです」を頼りに、後半部分に「日本人にはいい人もいますが、国としては嫌いです」という内容が含まれているはずだとして、編集で抜き出すことにしました。

＜図３　スタジオ収録用ＶＴＲ＞

タイム尺	映像素材	テロップ
02 秒 13 F	日本という国は、嫌いです。	嫌いですよ
10 秒 04F	反省しないということ。 以前から過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと…	歴史を反省しない所が非常に残念です ***日本人にはいい人もいますが、*** ***国としては嫌いです***

＜図４　編集の過程＞

タイム尺	映像素材	テロップ
5 秒	※最終編集でカット ～～～～～～～～～～～～～～ 過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと… ～～～～～～～～～～～～～～ ※この部分の映像は収録用ＶＴＲの段階で、編集でカットされています。	※左映像素材に対応するテロップはカットされました。 ～～～～～～～～～～～～～～～～～～ ***日本人にはいい人もいますが、*** ***国としては嫌いです*** ※このテロップだけ残りました。

しかし、映像に残っている音声を通訳などに確認しなかったため、＜図４＞の、「過去の歴史を反省せず、そのような部分が私にはちょっと…」という網掛け下線部分の映像素材が誤って編集されてしまいました。結果として、インタビューの映像と日本語テロップ並びに吹き替えナレーションが異なるＶＴＲ＜図５＞が完成することになりました。

＜図５　放送したＶＴＲ＞

タイム尺	映像素材	テロップ
5 秒	過去の歴史を反省せず、 そのような部分が私はちょっと…	***日本人にはいい人もいますが、*** ***国としては嫌いです***

Ｂディレクターは、インタビュー部分の翻訳シートと映像素材を改めてチェックすることも、Ａディレクターに問い合わせることもありませんでした。これについて、Ｂディレクターは「韓国語の言葉の切れ目がわからなかったので、翻訳部分の日本語のテロップに合わせて、スタジオ収録用ＶＴＲを切り取った」と話しています。日本語の翻訳テロップと韓国語の音声に齟齬が起きる可能性についても「意識が及ばなかった」と話しています。

６月４日（木）　　ナレーション収録　最終段階でのチェックミス

再びＭＡスタジオで、最終段階でのナレーション収録を実施。問題の２つのインタビューについても、日本語による吹き替えを改めてやり直すという形で収録。問題の２つのインタビューの間違いを修正する最後のチャンスでしたが、翻訳をチェックする人（通訳など）の立ち会いはなく、放送用のＶＴＲが完成しました。

６月５日（金）　　放送

２１時から２２時５２分まで全国ネットで放送しました。

４．問題発覚後の対応

６月２７日（土）　昼頃　視聴者からの電話

視聴者対応窓口の担当者より、視聴者からの電話についてＣＰに連絡。内容は「（池上彰緊急スペシャル！で）韓国人の女子高校生にインタビューをしている映像が流れたが、実際は韓国語で『文化が多くて外国人がたくさん訪れている』と話しているのに、字幕とナレーションでは『私は日本が嫌いです。昔苦しめたから嫌いです』となっていた」との指摘で、ネット上でも話題になっていて、数件同様の指摘が入っている、というもの。

ＣＰは情報制作局幹部に報告。幹部は、直ちに内容確認と取材テープ、翻訳資料など、ミスの有無を確認するために必要なものを、全て保存するよう指示。

同日　　夜　チェック確認作業

制作会社に、放送されたＶＴＲ、オリジナルの韓国語が聞こえるナレーションをつける前のＶＴＲ、取材テープ、翻訳シートなどが揃っていることを確認。韓国語通訳を呼び、全てのインタビュー部分をチェックしたところ、誤りが２か所あることが判明。ＣＰは、テロップに書かれた言葉は、実際に取材テープに存在するものの、映像を間違って使用していたことを情報制作局幹部に報告。その後、社内関係部署と連絡を取り対応を協議。

６月２８日（日）　フジテレビ社内緊急対応会議

関係部署担当者が集まり、緊急対応会議を開催。「お詫び」を掲載する方針を決定。

６月２９日（月）　「お詫び」をホームページに掲載

１２時１５分に、以下の「お詫び」をフジテレビ公式ホームページ上に掲載。

お詫び

６月５日に放送した金曜プレミアム「池上彰 緊急スペシャル！」において、韓国の方に日本についてインタビューしているＶＴＲで、２カ所合わせて約 10 秒、翻訳テロップ並びに日本語吹き替えナレーションの内容と異なる映像を、誤って使用していたことが分かりました。

①　女性がインタビューに答えるシーン

「嫌いですよ、だって韓国を苦しめたじゃないですか」と、答えている部分で、誤って、韓国を好きな理由について話している、「文化がたくさんあります。だから、外国の人がたくさん訪問してくれているようです」という映像部分を使用していました。この女性は、インタビューの別の部分で、実際に「日本が嫌いです」と答えています。

②　男性がインタビューに答えるシーン

「日本人にはいい人もいますが、国として嫌いです」と、答えている部分で、誤って、「過去の歴史を反省せず、そういう部分が私はちょっと･･･」と話している映像部分を使用していました。この男性も、別の部分で実際にこのように発言しています。

いずれも、編集作業でのミスに加えて、最終チェックが不十分であったため、誤った映像を放送してしまいました。視聴者の皆様、インタビューにご協力いただいた方々、並びに関係者の皆様にお詫び申し上げます。今後はこのようなことがないよう再発防止に努めてまいります。

６月３０日（火）～　　検証作業開始

調査班を立ち上げ、番組制作に関わった関係者からの聞き取り調査を開始。

７月４日（土）　「新・週刊フジテレビ批評」で放送対応

自己検証番組「新・週刊フジテレビ批評」（毎週土曜日５時～６時　生放送）内で、２分１０秒間、ホームページでお詫びした内容など今回の問題について放送。

５．問題点と対応策

●最終チェック体制の不備

今回のミスは、いずれも最終段階での精密なチェックが行われていれば、確実に防げた事例です。初期段階での翻訳では丁寧な作業が行われましたが、フジテレビのプロデューサーや危機管理担当者は、それ以降放送まで一切の翻訳チェックがなされないという、極めて危うい態勢であることに気付かないまま、ミスを見過ごしてしまいました。

今回のケースではチェックする者の意識が、不適切表現につながる過剰演出や事実誤認、データの間違いがないか、偏向した内容になっていないか、など内容に向けられるに留まっており、翻訳がズレる問題にまで至っていませんでした。「翻訳等の基本的事項は、当然チェック済みであるはず」という思い込みが、ミスを見過ごす原因の一つになっています。

外国語の翻訳については、直訳のままでは日本語として意味が伝わりづらいため、趣旨を変えないように、自然でわかりやすい日本語に意訳していくという作業は日常的に行われています。さらに編集作業が進む過程で、語順の違い、意訳の程度などによって、当初の内容とズレが生じることがあります。

しかし、今回はその最終翻訳チェックの過程が、丸ごと抜けてしまっていました。

＜対応策＞

情報制作局が担当する番組の多くは生放送で、その制作過程では翻訳作業と編集作業が同時並行的に行われ、編集終了までそのまま通訳が立ち会うことが原則になっています。しかし収録番組では、編集が幾度にもわたるため、通訳による立ち会いは、それぞれの番組の裁量に任されていました。そのため今後は、**事前に収録する番組については最終段階で必ず、該当言語の翻訳スタッフによるチェックを制作過程に組み込むこと**を、基本にしたいと考えています。同時に、構成や事実関係など内容に関する問題点をチェックする担当と、客観的に問題点を洗い出す担当など、総合演出とプロデューサー、危機管理担当者の役割分担をより明確にし、多角的なチェック体制を築かなければならないと考えています。

●意識の共有、コミュニケーションが不十分

番組の趣旨、放送倫理意識の共有が不十分

今回の番組は、緊張状態が続く日韓関係をテーマに据えたことで、より高いレベルの危機管理意識が要求されるという認識のもとで制作されました。しかし、意識の共有がきっちりできていたかというと、結果的には不十分だったと言わざるをえません。

今回のミスのうち、女性のインタビューについては、注意力不足による入力ミスと推察できますが、男性のインタビューの場合は、海外の話題や翻訳に対する“慣れ”が、意訳の解釈を広げてしまった側面があると思われます。

便利になったデジタル編集時代の弊害

今回のミスは編集作業の過程で起こっています。男性の街頭インタビューの場合、当初は合致していた翻訳と映像が、編集を重ねていく過程でズレていったことが分かりました。第一段階の編集でＡディレクターが作成した仮の翻訳テロップが“ 正しい翻訳文 ”として、以降の作業の参考としてずっと使用されています。

テレビ番組制作のほとんどすべての現場では、何度編集をしても画質がそれほど劣化しない「デジタル編集時代」の作業が行われています。そのためオリジナル映像の内容を確認する機会が減り、編集したものを使って新しいＶＴＲを作り、それを使ってまた次の段階のＶＴＲを編集するという作業が基本になっています。今回の場合も、「１本化ＶＴＲ」の作成を担当したＢディレクターが、スタジオ収録用ＶＴＲを使って安易に編集したことで、翻訳のズレが決定的になってしまう結果となりました。便利になったがゆえに確認作業を怠り、コピー＆ペーストの手軽さに慣れてしまえば思考が停止する、デジタル機器はそのような危険性を孕んでいるということを肝に銘じる必要があります。

分業化に伴うコミュニケーション不足

前述したように、男性の街頭インタビュー部分の編集に関しては、途中で担当ディレクターが交代しています。今回のような大型スペシャル番組の場合、作業量が膨大になるため、分業するケースは増えており、その分、コミュニケーションミスによるトラブルが起こる可能性も増大します。今回のケースも、残念ながら「確認の上にも確認」という姿勢が不十分だったと言わざるをえません。

＜対応策＞

番組責任者はそのリーダーシップを発揮し、スタッフ全員に番組ごとの狙いや基本的なルールを理解させる責任があります。個々のディレクターの特性をしっかりと見抜き、それぞれに応じた放送倫理を含めた意識の共有に努めなければなりません。

特に外部の制作会社と番組制作を行う際は、プロデューサーやディレクター、ＡＤや関係スタッフに対して、**具体的な作業の打ち合わせに入る前に、情報番組としての取材・放送倫理を共有することを目的とした話し合いを持つことを必須にしたい**と考えています。その際、便利なデジタル編集時代だからこそ陥りやすい危険性についても指摘し、確認とコミュニケーションこそが、ミスを防ぐ最大の策であることを強調したいと思います。

今回の検証を通して浮かび上がった問題点をいかに克服していくかという課題について、情報制作局では、**常駐スタッフはもちろん制作会社の責任者を含めた制作スタッフに対しても、ケーススタディーとして提示し、番組ごとに議論の場を設け、意識の共有を徹底したい**と考えています。

以上